

感動の環境

(財) リバーフロント整備センター 理事長 竹村 公太郎



自動ドアの前で

あるビルの玄関で待ち合わせをしていた。相手がいつ来るかと外を覗くたびに自動ドアが開いてしまう。それがうとうとしいのでジーと自動ドアの前で体を動かさないと外を覗いていた。体を動かさなければ自動ドアのセンサーは私をキャッチしない。ドアは閉まったままであった。

そのときハッと気がついた。自動ドアのセンサーは微分なのだ、センサーは積分ではない！ことに気がついた。

センサー

自動センサーを設計したり作ったりしている専門家にとっては当たり前のことなのだろう。何か動くことによって、その動きをキャッチする。その動くものは光であったり、音であったり、匂いであったりする。

センサーがキャッチするのは全て短い時間内に起きる現象、つまり変化である。変化とは現象を時間で割った微分である。その変化値が大きければセンサーはキャッチする。変化値が小さければセンサーはキャッチしない。その現象の規模がいくら大きくても、その現象が変化しなければセンサーはキャッチしない。

積み重ねた積分値がいくら大きくても、変化の微分値が小さければセンサーはキャッチしないのだ。相撲取りの身体がいくら大きくても、動かなければセンサーはキャッチしないのと同じだ。

感動のない公共事業

戦後、公共事業は日本国民の「安全」と「安心」と「豊かさ」を追い求めて邁進してきた。その公共事業は「効率」という手法を駆使して見事にそれを達成しつつある。

しかし、なぜか公共事業は評判が良くない。考えてみればそれは当たり前だ。安全と安心と豊かさが積み重ねられた空間に変化や揺らぎはない。公共事業は積み重ねの積分の世界で、変化や揺らぎがない。変化や揺らぎのない世界、微分のない世界、それは感動のない世界なのだ。

人の心は危険や不安の中で、わずかな安全や安心に出会って感動する。人々は貧しさの中で、わずかな豊かさを得て感動する。安全や安心や豊かさが積分された社会では、人の心のセンサーは多少の変化ではキャッチせず感動しない。

この安全・安心・豊かな社会を造ってきた「効率的な手法」も感動からは程遠い。効率的な手法とは最短距離の一本道である。そこには寄り道もないし、迷い道もない。そのような一本道を歩いて心のセンサーを敏感にしるといっても、どだい無理な話だ。

感動のないデータ

公共事業が感動から遠いという理由に「データ依存」がある。公共事業は字のごとく公平でなければならない。公平に事業を行うために必要なものは客観的なデータである。人々の熱い思い、切なる願い、

それは往々にして不公平に陥る。

そのため公共事業では客観的なデータを基に判断される。データは誰がみても同じである。何所へ持っていても、何時みても変わらない。公平性を重んじる行政はこのデータを駆使して論理をつくり、人々に説明していく。

でも、考えてもらいたい。何所でも、何時でも、誰が見ても変わらないデータ、それは「死んでいる」ことなのだ。動かないということは死んでいることなのだ。人々は生きているものに心を動かさず。人々は死んでいるものに心を動かさない。だから、行政の客観的なデータに基づく説明に人々が心を動かさずはずがない。

公共事業は人々の感動の世界から遠いところに位置しているのだ。

やっかいな環境

ところが、この公共事業の世界に異物が入り込んできた。それは「環境」という分野であった。8年前、河川法の第一条の目的に「河川環境」という言葉が付け加えられた。河川行政の目的は「治水」と「利水」と「環境」になった。河川工事を行うために環境に配慮するのではない。環境保全そのものが目的になったのだ。

河川行政は難しいことになった。治水、利水は過去のデータの蓄積があり「将来、その過去のデータが再現する」という考え方で進める。そのため治水目標も利水目標もその時の社会状況で人為的に決めることができる。そして、社会状況に応じて必要ならいつでも見直しをして、変更することもできる。

ところが、自然環境は違う。自然はいつも揺れ、動き、移り変わっていく。過去の自然が将来において再現することはない。手入ぐらいはできるが、人間が自然を制御することもできない。自然は移るべくして、移っていく。人間が見直しをしたり、変更をしたりはできない。

河川行政はやっかいなものを抱え込んだのだ。

感動の環境

この環境行政に携わる人々はとまどい悩む。なにしろ環境には学ぶべき前例がない。前例は全て過ぎ去った環境であり、今、自分が当面している環境問題とは全く別物である。また、環境には分かりやすい真直ぐな一本道などない。数知れなく枝分かれしている道ばかりで、寄り道や迷い道や袋小路の道だらけである。誰も確信をもって断定しないし、誰も自信にあふれた言葉で導いてくれない。

しかし、揺れ、動き、移り変化している環境の世界では、いつも心のセンサーは何かを感じている。なぜなら、環境はいつも微分しているから心のセンサーは感じるのだ。迷い道や寄り道をしているからこそ心のセンサーは敏感になり、少しでも揺れ、動くものに反応していくのだ。

心が反応することは「感動」である。河川という行政に「感動」が入り込んできたのだ。